

2024年2月11日（大斎節前主日、B年）

牧師メッセージ

「これはわたしの愛する子。これに聞け。」

（マルコによる福音書9:2-9）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音の直前の箇所では、イエスがご自分の受難について弟子たちに話します。そして、この変容の出来事へ続きます。ご受難へと歩いていくその前に、この出来事が不可欠だったということです。イエスの受難、そして復活へと歩む大斎節を前に、わたしたちも今日の福音に聴かなければなりません。

モーセとエリヤはそれぞれ律法と預言者を表し、旧約を代表する二人とされていました。山の上でそのモーセとエリヤがイエスと語り合うのを見たペトロは、その時をそのまま留めておきたいと願い、仮小屋を三つ建てることを提案します。これが人間の思いです。今、目の前に栄光があるなら留めておきたい、という思いです。けれども、ペトロの望み通りにはなりません。弟子たちを雲が覆い、雲の中から声が聞こえました。

「これはわたしの愛する子。これに聞け。」

神はこの声によって、仮小屋を建ててこの光景に留まるのではなく、イエスに従って歩いて行きなさいと弟子たちを導きました。なぜなら、この先のイエスの受難と復活によってこそ、栄光が表されるからです。

イエスの姿が変わる光景を目の当たりにした弟子たちは恐れに震えました。もしかすると彼らは、イエスの受難予告を思い出し、恐れたのかもしれませんが。ペトロや弟子たちが期待していたメシアは、地上の栄光に輝くメシアであり、十字架上で死んでしまうようなメシアではありませんでした。これもまた、ペトロが仮小屋を建てたかったことの理由かもしれません。受難予告をするような人間、死んでしまうメシアなど信じられない。自分たちの望む栄光の姿にイエスを収めたいのです。

さあ、大斎節に入ろうとしているわたしたちはどうでしょうか。イエスに何を求めているでしょうか。自分の思いの中にイエスを収めていないでしょうか。イエスは、そして神はわたしたちに復活の栄光、誠の希望をこそ用意してくださっています。「死」だけしか見えない弟子たちに、イエスが山上で「復活」を垣間見せたように、わたしたちにはイエスの復活の栄光がすでに明らかにされています。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」という神の声の後、弟子たちがあたりを見回すと、そこにはイエスだけが彼らと一緒にいました。他でもないこのイエスこそが、わたしたちと共におられ、導いてくださる方です。大斎節、この神の促しに従い、十字架へと歩むイエスの姿を見つめ、イエスによってこそ示される誠の希望に向かって歩いてまいりましょう。